

## 環東中国海の先史漁撈文化

### 一 はじめに

甲 元 眞 之

中国東海岸と台湾、それに朝鮮半島と九州に囲まれた環東中国海沿岸地域の密接な交流に関しては、かつて凌純声が「東亜地中海」と形容したように極めて活発であった。こうした交流の実態については、最近とみに中国や日本、それに朝鮮の国家・政治体制との関りで論じられることが多くなってきたが、その来歴に関しては、稲作農耕の日本への導入過程で取り上げられるのみで、その交流を担った先史時代漁民の存在に関しては必ずしも積極的な考察の対象とはなされてこなかったと言える。こうした中、渡辺誠、雨宮瑞生、金建沫はこの地域の釣針に対して、一定の検討を加えた。渡辺は中国の釣針を集成して初めて中国全体の釣針の動向を明らかにし、更に朝鮮と西日本の釣針に関して、「交流」の視点から分析を行っている<sup>1)</sup>。基礎的資料を出来るだけ集成して検討を行うという氏の手法に学ぶべき点は多くあるが、黄・渤海地域や東北朝鮮・沿海州地域との関連は不明のままに残されている。雨宮は「環東中国海所地域」の観点から骨角牙製漁撈具を分析し、更に西日本の釣針にも考察を広げているが、沖繩、台湾には言及するものの韓国を含めて黄渤海沿岸地域を考察の対象からはずしたために、その結論は一面的なものに終わっている<sup>2)</sup>。金建沫は韓国の先史・古代漁業を総合的に把握しようとした意欲的論文を提示したが、具体的な漁法の復元が不十分で、自然遺物との相関関係についてあまり考慮

## 環東中国海の先史漁撈文化（甲一元）

しなかったことから、遺物論に終始し説得的であるとは言い難い<sup>(3)</sup>。

先史時代の漁撈は言うまでもなく、対象とする魚種との関連において分析する必要がある、そのためには広域的な視野で漁具の検討を行うか、あるいは申叔静のように小範囲の生態環境内での相互関係を徹底して行うという手法<sup>(4)</sup>が望まれるであろう。

弥生時代に先立つて漁民の活動が顕著になるのは、縄文時代早期末から前期初頭の最温暖期を中心とする時期（紀元前五、〇〇〇年紀から四、〇〇〇年紀中頃）と縄文時代後期（紀元前三、〇〇〇年紀末から二、〇〇〇年紀）の二時期であり、それは貝塚の形成や朝鮮と共通する豊富な先史時代漁具の出土で示される<sup>(5)</sup>。前者の時期には沿海州から朝鮮東部沿岸地域に展開する寒流系漁撈具と共通する点が多いのに対して、後者の紀元前二千年紀の漁撈具は寒流系に加えて、中国渤海湾沿岸地域で発達する種類と共通する側面も見られ、弥生文化形成にあたっての重要な役割を担う先駆けとも見ることが出来る。ここではそうした漁撈具の中で釣具に焦点を当て、その使用法、対象となる魚類について検討し、当時の漁民活動の一端を把握することにする。

## I

環東中国海沿岸地域の新石器段階に見られる漁撈具のうち釣針は、単式釣針、逆T字形釣針と結合式釣針の三種で構成される。単式釣針（single hook）は逆刺の有無と付ける場所により、三種類に分類できる。

A…無逆刺

B…外逆刺

C…内逆刺

また材質により

a .. 骨製

b .. 牙製

c .. 貝製

とする。

逆丁字形釣針 (slender gorge, throat gorge) は長さが五—一〇 cm の両端を尖らした棒状の釣針で、針中央部に緊縮のため設けた挟りの有無により、二種類に区分される。

A .. 無挟

B .. 有挟

これまでのところ、逆丁字形釣針の素材は骨角製品のみが知られている。形態が極めて単純なことから、ヤスなどの刺突具と混同されがちであり、これが注目されることにより出土数が今後増加することが予想される。

結合式釣針 (composite hook) は釣針の針先と軸を別個につくり、結び付けるもので、単式釣針よりも古くから製作された釣具である。軸部と針部の素材により、次の種類に分けられる。

軸部 (shank)

針部 (barb)

A .. 骨角製

A .. 骨角製

B .. 石製

B .. 牙製

C .. 貝製

C .. 爪製

D .. 牙製

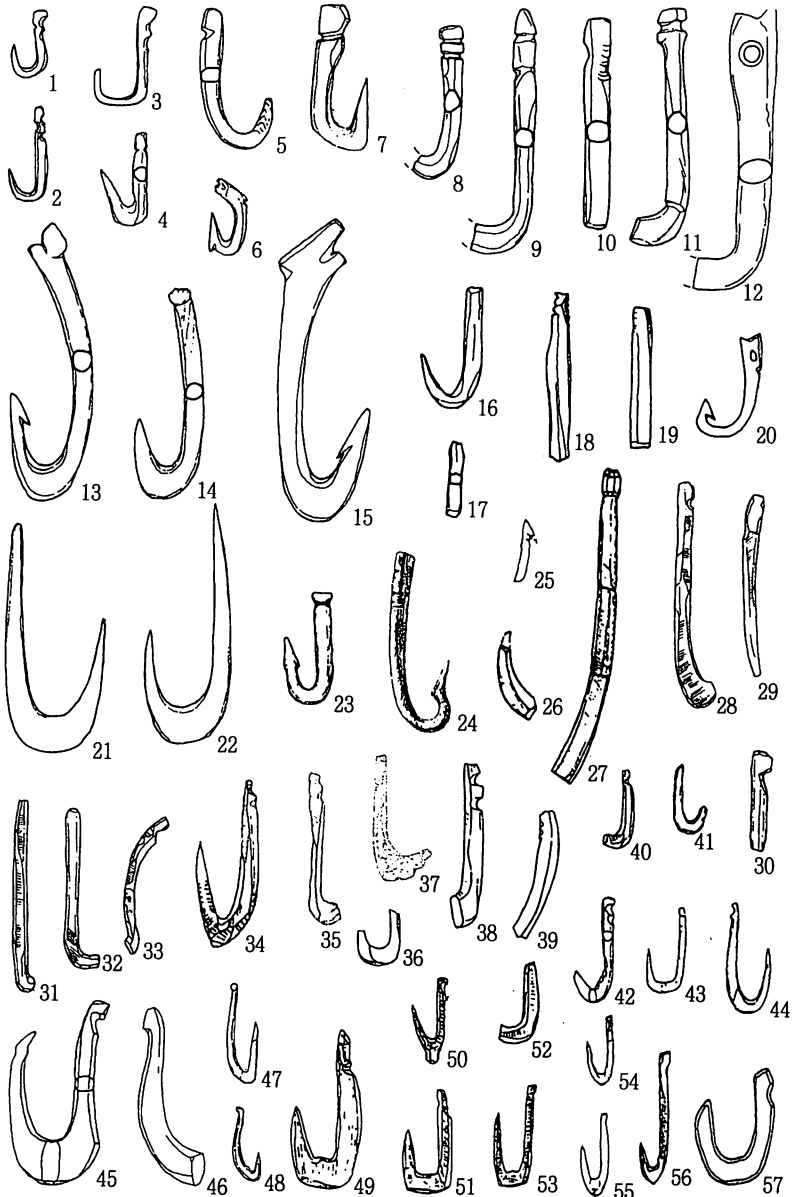
D .. 石製

第1表 単式釣針出土遺跡

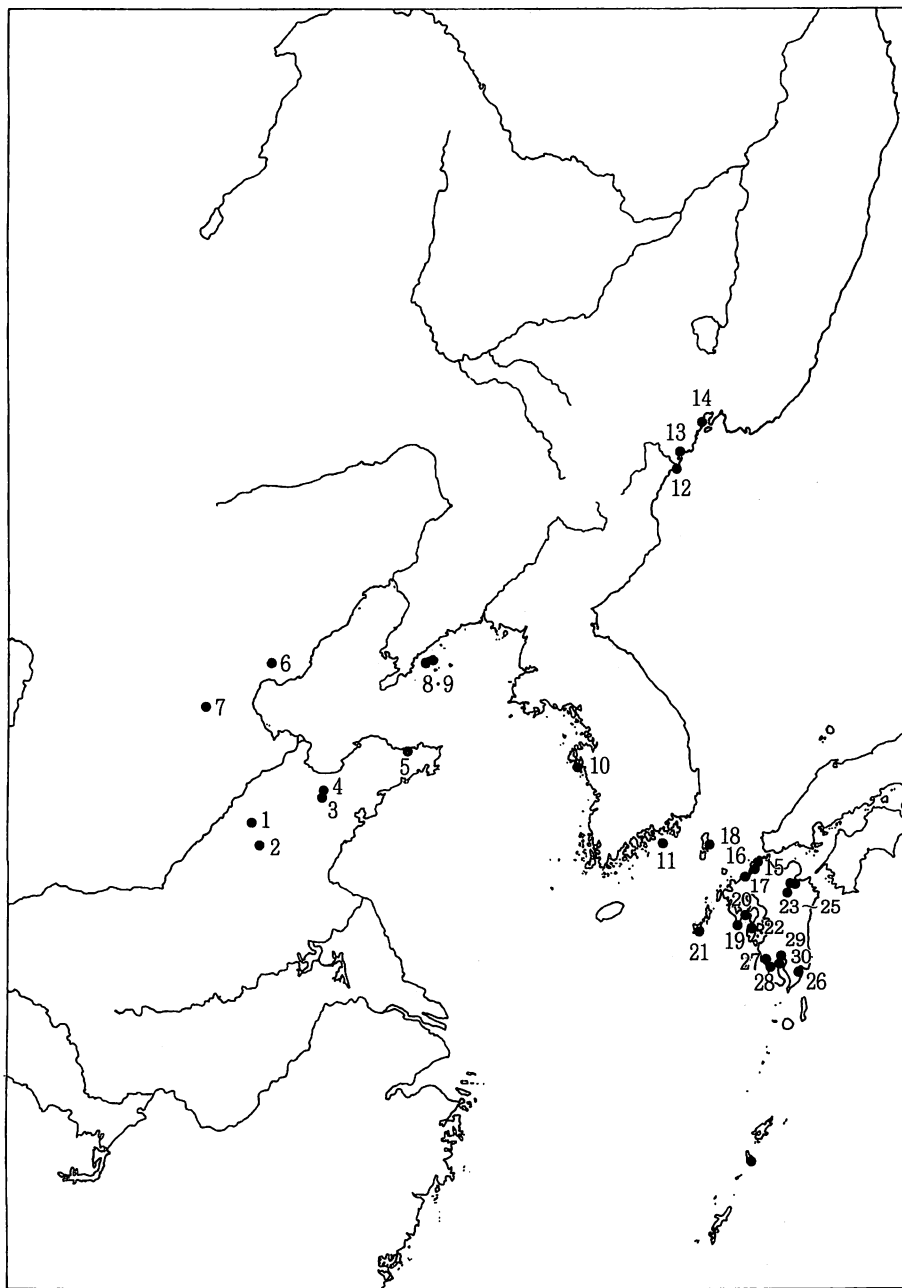
番号	遺跡名	所在地	所属年代	形式	数量	備考
1	大汶口	山東省泰安市	大汶口文化	Ab	3	軸上端に抉り
2	尹家城	泗水県	周代	Ac	1	軸上端に抉り
3	姚官荘	濰坊県	龍山文化後期	Aa	1	軸上端に抉り
4	魯家溝	濰坊県	大汶口文化	Aa	1	軸上端に2条溝
			龍文化	Aa	2	軸上端に2条溝
5	照格荘	牟平県	岳石文化	Aa	1	軸上端に溝
6	大城山	河北省唐山市	龍山文化	Ba	1	軸上端に溝
				Aa	1	軸上端に溝
7	唾叭荘	任邱市	龍山文化	Aa	1	軸上端に孔
8	英杰村	遼寧省長海県	上石馬上層文化	Ca	3	
9	上石馬	長海県	上石馬上層文化	Aa	1	
10	古南里	忠清南道泰安郡	青銅器時代	Aa	2	
11	東港里	慶尚南道統営部	新石器時代	Aa	2	
12	西浦項	咸鏡北道先鋒部	新石器時代	Ab	2	
				Cb	1	
13	ボイスマン	沿海州	新石器時代	Ca	1	軸上端に溝
14	ベスチャヌイ	沿海州	青銅器時代	Ca	1	軸上端に溝
15	山鹿	福岡県遠賀郡	縄文時代前~後期	Ba	1	針部のみ
16	新延	鞍手郡	縄文時代中期	不明	1	軸のみ
				a	1	針部のみ
			縄文時代後期	a	1	軸部のみ
17	天神山	糸島郡	縄文時代後期		1	
18	佐賀	長崎県上県郡	縄文時代後期	a	6	軸のみ
19	脇岬	長崎県西彼杵郡	縄文時代後期	Aa	1	
				a	1	
20	有喜	諫早市	縄文時代中~後期	a	1	
21	宮下	南松浦郡	縄文時代後期	a	1	
22	沖ノ原	熊本県天草郡	縄文時代後期	Aa	4	軸上端に2条溝
23	小池原	大分県大分市	縄文時代後期	Aa	1	軸上端に2条溝
24	横尾	大分市	縄文時代後期	Aa	1	針部先端欠損
25	竜宮	直入郡	縄文時代後期	Aa	2	軸上端に抉り
26	片野	鹿児島県曾於郡	縄文時代後期	Aa	1	軸上端に抉り
27	麦の浦	川内市	縄文時代後期			
28	市来	日置郡	縄文時代後期			
29	草野	鹿児島市	縄文時代後期	Ab	7	軸上端に抉り
30	武		縄文時代後期	Aa	2	
31	犬田布	大島郡	縄文時代晩期	Ac	1	軸上端に抉り

文献（第1表の遺跡番号に同じ）

- 1 山東省文物管理所・済南市博物館『大汶口』1971年。
- 2 山東大学歴史系考古專業『泗水尹家城』1990年。
- 3 山東省文物考古研究所・山東省博物館・中国社会科学院考古研究所山東隊・山東昌濰坊地区文物管理小組「山東姚官莊遺址発掘報告」『文物資料集刊』5、1981年。
- 4 中国社会科学院考古研究所山東工作隊・山東濰坊地区芸術館「濰県魯家溝新石器時代遺址」『考古学報』1985年3期
- 5 中国社会科学院考古研究所山東隊・煙台市文管所「山東牟平照格莊遺址」『考古学報』1986年4期。
- 6 河北省文物管理委員會「河北唐山市大城山遺址発掘報告」『考古学報』1959年3期。
- 7 河北省文物研究所・滄州地区文物管理所「河北省任邱市唾叭莊遺址発掘報告」『文物春秋』1992年、増刊号。
- 8 三宅俊成『東北アジア考古学研究』1975年。
- 9 遼寧省博物館・旅順博物館・長海県文化館「長海県広鹿島大長山島貝丘遺址」『考古学報』1981年1期、渡辺誠「中国古代の釣針」『東アジアの考古と歴史』1991年。
- 10 漢陽大学校博物館『安眠島古南里貝塚』1990、91、93、97。
- 11 国立晋州博物館『欲知島』1989年。
- 12 金用珩・黄基德「西浦項原始遺跡発掘報告」『考古民俗論文集』4、1972年。
- 13 Д.Д.Бродянский Неолит и палеометалл Южного Приморья, 1995, ДЛ.Бродянский et.al. Раковина куча в Бухте Ыоисмана. Вестник ДВОРАН 1995-4.
- 14 А.П.ОКАДНИКОВ Древнее поселение на полуострове песчаном у Владивостка. ИЗДАТЕЛЬСТВО АКАДЕМИИ НАУК СССР 1963.
- 15 山鹿貝塚調査団『山鹿貝塚』1972年。
- 16 鞍手町埋蔵文化財調査会『新延貝塚』1980年。
- 17 山崎純男の教授による。
- 18 長崎県峰町教育委員会『佐賀貝塚』1989年。
- 19 坂田邦洋『対馬の考古学』1976年、長崎県教育委員会『原始・古代の長崎県 資料編Ⅱ』1997年。
- 20 諫早市教育委員会『有喜貝塚』1984年。
- 21 長崎県教育委員会『原始・古代の長崎県 資料編Ⅰ』1996年。
- 22 五和町教育委員会『沖ノ原遺跡』1984年。
- 23 雨宮瑞生「南九州の縄文釣針」『季刊考古学』第25号、1988年。
- 24 注23に同じ。
- 25 注23に同じ。
- 26 注23に同じ。
- 27 注23に同じ。
- 28 鹿児島県日置郡市来町教育委員会『川上（市来）貝塚』1991年。
- 29 鹿児島市教育委員会『草野貝塚』1988年。
- 30 渡辺誠『日韓交流の民族考古学』1995年。
- 31 鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会『犬田布貝塚』1984年。



第1図 単式釣針実測図 (縮尺1/2) 1~3;大汶口、4;姚官莊、5;尹家城、6、7;大城山、8~10;魯家溝、11;照格莊、12;啞叭莊、13・14;上馬石、15;英杰村、16・17;古南里、18・19;東港里、20~22;西浦項、23;ボイスマン、24;ベスチャヌイ、25・26;山鹿、27;新延、28~33;佐賀、34;脇岬、36~40;沖ノ原、41;横尾、42;小池原、43・44;竜宮、45;片野、46~48;市来、49~56;草野、57;犬田布



第2図 単式釣針出土遺跡分布図（数字は一覧表の番号と一致）

第2表 逆T字形釣針出土遺跡

番号	遺跡名	所在地	所属年代	形式	数量	備考
1	魯家溝	山東省濰縣	大汶口文化	A	1	
			龍山文化		1	
2	白石村	煙台市	大汶口文化	B	2	両側刻み
3	三堂村	遼寧省瓦房店市	高台山文化	B	4	両側刻み
			小殊山上層文化	B	1	片側刻み
4	双砬子	大連市	双砬子第2期文化	B	4	
			双砬子第3期文化	B	2	
5	羊頭窪		双砬子第3期文化	A	6	
				B	9	片側と両側刻み
6	大台子		双砬子文化	A	1	
7	郭家村		郭家村下層文化	A	1	
			郭家村下層文化	A	1	
				B	1	片側刻み
8	於家村		双砬子文化	A	3	
9	大嘴子		双砬子文化	B	4	片側と両側刻み
10	上石馬	長海県	上石馬上層文化	A	42	
11	礪磧崗		上石馬上層文化	A	1	
12	大藩家村	大連市	小殊山中層文化	A	2	
				B	3	両側抉り
13	東港里	慶尚南道統營郡	新石器時代	B	2	両側抉り
14	東三洞	釜山市	新石器時代	A	数点	
15	新延	福岡県鞍手郡	縄文時代後期	A	1	
16	志多留	長崎県上県郡	縄文時代後期	B	3	中央窪み
17	佐賀		縄文時代後期	B	3	中央に刻み
18	脇岬	西彼杵郡	縄文時代後期	A		
19	大浜	福江市	縄文時代後期	A	1	
				B	1	中央窪み
20	中島		縄文時代後期	A	3	
21	室川	沖縄県沖縄市	縄文時代後期	B	1	両側に抉り

環東中国海の先史漁撈文化（甲元）

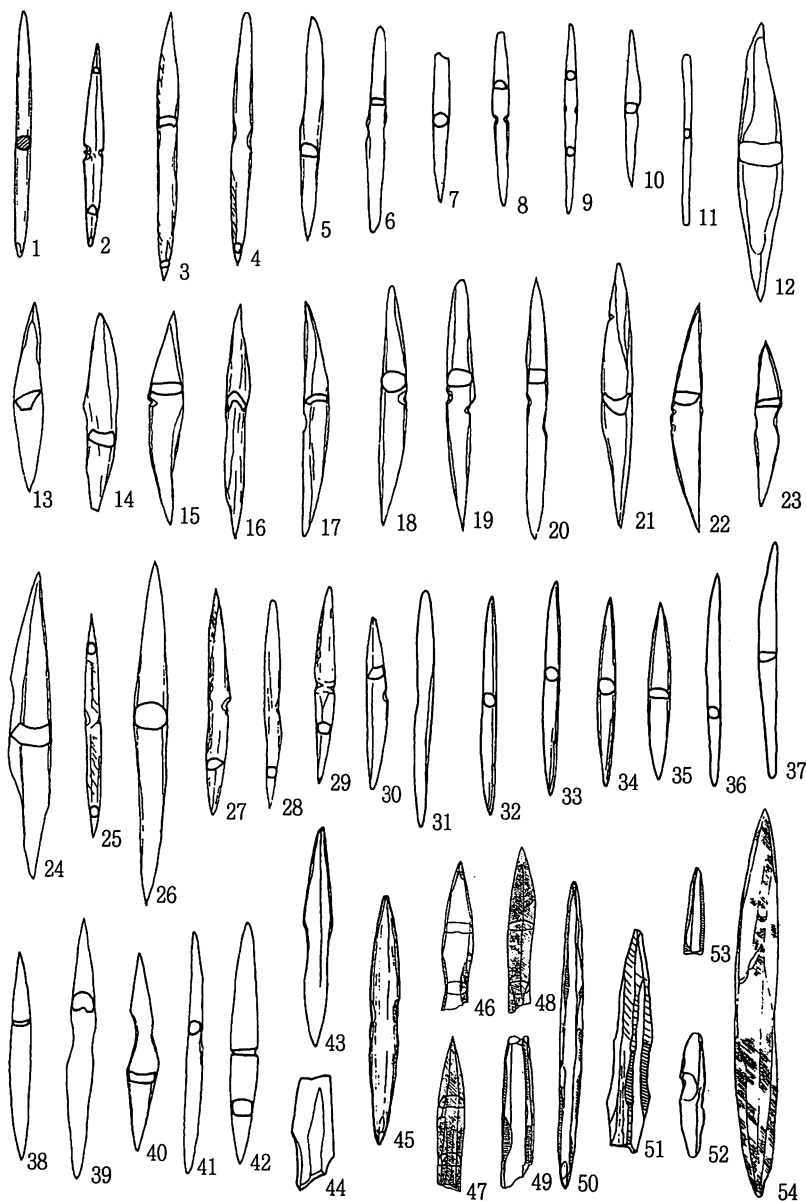
文献（第2表の遺跡番号に同じ）

- 1 中国社会科学院考古研究所山東工作隊・山東省濰坊地区芸術館「濰縣魯家溝新石器時代遺址」『考古学報』1985年1期。
- 2 煙台市文物管理委員会「山東煙台白石村新石器時代遺址発掘簡報」『考古』1992年7期。
- 3 遼寧省文物考古研究所・吉林大学考古系・旅順博物館「遼寧省瓦房店市長興島三堂村新石器時代遺址」『考古』1992年2期。
- 4 中国社会科学院考古研究所『双砬子与崗上』1996年。
- 5 東亜考古学会『羊頭窪』1942年。
- 6 森修「関東州旅順管内内山頭村会大台山遺蹟」『考古学雑誌』17巻5号、1927年。
- 7 遼寧省博物館・旅順博物館「大連郭家村新石器時代遺址」『考古学報』1984年3期。
- 8 遼寧省博物館・旅順博物館「旅順於家村遺址発掘報告」『考古学集刊』1、



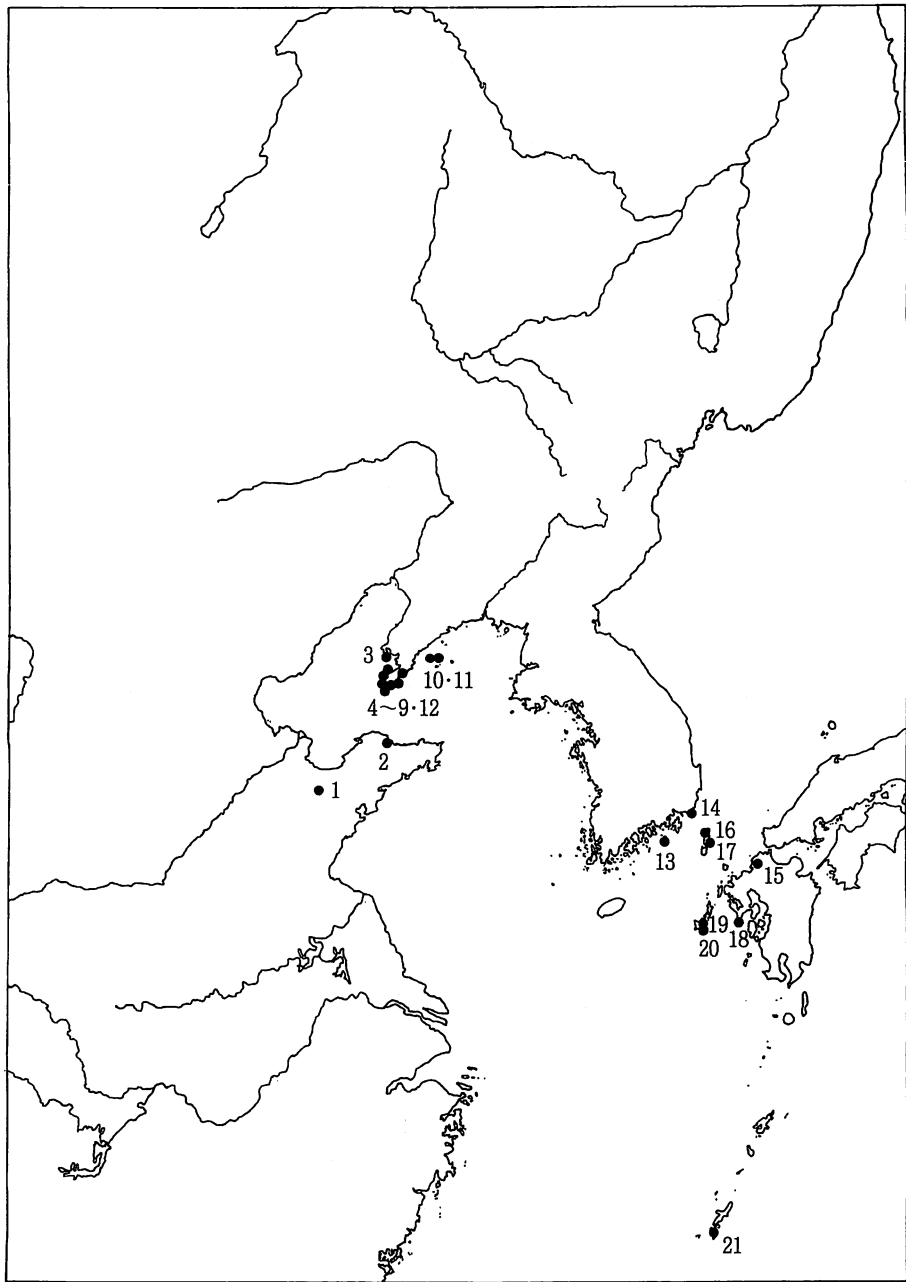
1981年。

- 9 遼寧省文物考古研究所・吉林大学考古系・大連市文物管理委員会「遼寧大連大嘴子青銅器時代遺址の発掘」『考古』1996年2期。
- 10 遼寧省博物館・旅順博物館・長海県文化館「長海県広鹿島大長山島貝丘遺址」『考古学報』1981年1期、渡辺誠「中国古代の釣針」『東アジアの考古と歴史』1987年。
- 11 注10に同じ。
- 12 大連市文物考古研究所「遼寧大連大藩家村新石器時代遺址」『考古』1994年10期。
- 13 国立晋州博物館『欲知島』1989年。
- 14 及川民次郎「南朝鮮牧ノ島東三洞貝塚」『考古学』4巻5号、1933年、横山将三郎「釜山府絶影島東三洞貝塚報告」『史前学雑誌』5巻4号、1933年、L.L. Sample, *Tongsandong-A Contribution to Korean Neolithic Culture History*. *Arctic Anthoropology*.11-2, 1974 .
- 15 鞍手町埋蔵文化財調査会『新延貝塚』1980年。
- 16 坂田邦洋『対馬の考古学』1976年。
- 17 長崎県峰町教育委員会『佐賀貝塚』1989年。
- 18 注16に同じ。
- 19 長崎県教育委員会『大浜遺跡』1998年。
- 20 福江市教育委員会『中島遺跡』1987年。
- 21 沖縄国際大学考古学研究室「室川貝塚2～4次発掘調査概報」『冲国大考古』第4号、1980年。



第3図 逆T字形釣針実測図（縮尺1/2）1；魯家溝、2；白石村、3・4；三堂村、5～11；双砣子、12；大台子、13～24；羊頭窪、25；郭家村、26；於家村、27～30；大嘴子、31～36；上馬石、37；蠣磧崗、38～42；大藩家村、43～44；東港里、45；新延、46～48；志多留、49～51；大浜、52；室川、53・54；中島

環東中国海の先史漁撈文化（甲元）



第4図 逆T字形釣針出土遺跡分布図（数字は一覧表の番号と一致）

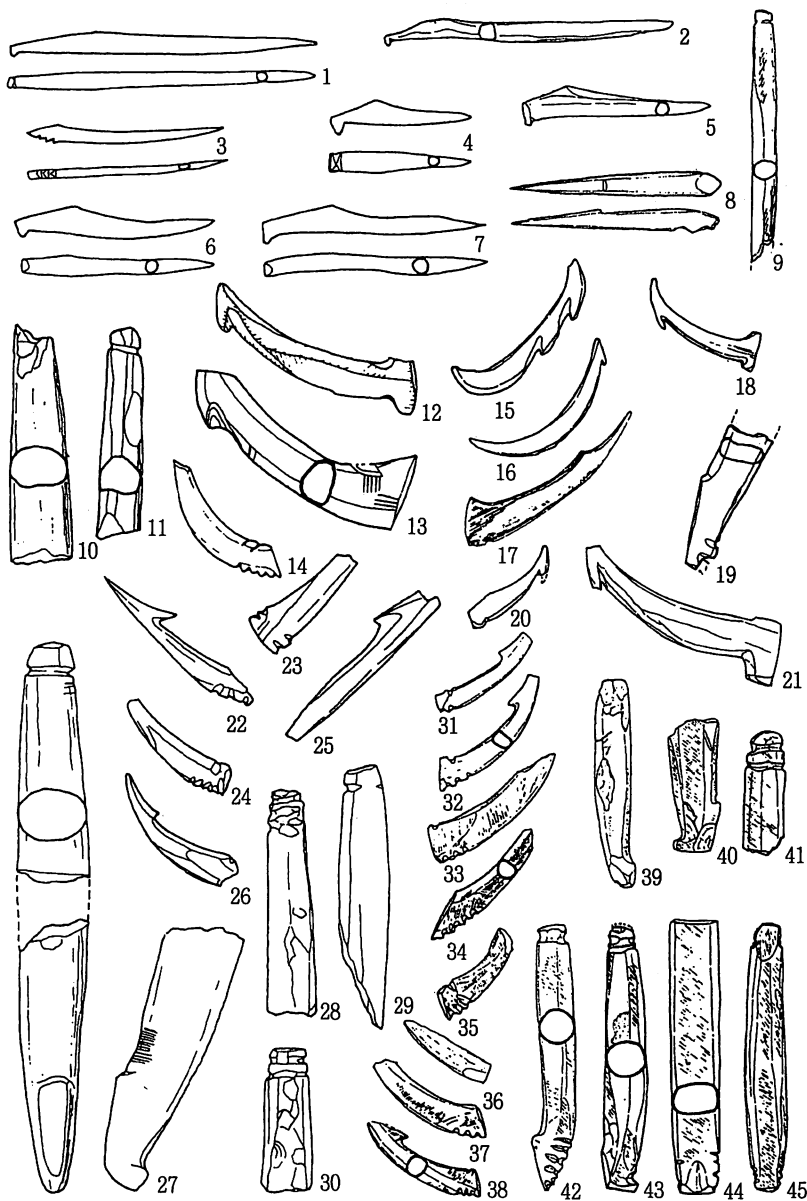
第3表 結合式釣針出土遺跡

環東中国海の先史漁撈文化（甲元）

番号	遺跡名	所在地	所属年代	形式	数量	備考
1	郭家村	遼寧省大連市	郭家村文化	A	5	軸刻みあり
2	大嘴子		双砬子文化	A	1	軸刻みあり
3	北呉屯	莊河市	小殊山文化	A	2	
4	安島	全羅南道麗川市	新石器時代後期	B	1	軸
5	大鏡島	麗川郡	新石器時代	A	1	軸
				A	5	先
				B	1	先
6	松島		新石器時代後期	B	2	軸
				A	2	先
7	東港里	慶尚南道統郡	新石器時代後期	B	1	軸
				A	1	先
8	上老大島		新石器時代後期	A	1	軸
				A	5	先
				B	1	先
9	煙台島		新石器時代前期	A	1	軸
				A	6	先
			新石器時代後期	B	4	軸
				A	5	先
10	旧坪里	泗川郡	新石器時代後期	A	1	先
11	農所里	金海市	新石器時代後期	A	1	先
12	凡方洞	釜山市	新石器時代	B	6	軸
				A	1	軸
				A	8	先
				D	1	先
13	東三洞		新石器時代	B	8	軸
				A	1	軸
				A	12	先
14	新岩里	慶尚南道蔚州郡	新石器時代	B	5	軸
15	牛峰里		新石器時代	B	2	軸
16	望山里	江原道東海市	新石器時代			
17	鰲山里	襄陽郡	新石器時代前期	B	53	軸
18	校洞	春川市	新石器時代	B	1	軸
19	草島	咸鏡北道羅津市	青銅器時代	A	15	
				A	49	先
20	ベスチャヌイ	沿海州	青銅器時代	A	8	先
				A	4	軸
21	山鹿	福岡県遠賀郡	縄文時代前期	B	1	先
			縄文時代中期	B	1	先
22	新延	鞍手郡	縄文時代	B	1	先
23	桑原飛櫛	福岡県福岡市	縄文時代後期	B	1	先
24	菜畑	佐賀県唐津市	縄文時代前期	B	4	先
25	佐賀	長崎県上県郡	縄文時代後期	B	15	先
				A	4	軸
26	志多留		縄文時代後期	B	2	先
27	下本山	佐世保市	縄文時代後期	A	1	軸
28	脇岬	西彼杵郡	縄文時代後期	A	3	軸
				B	5	先
29	宮下	南松浦郡	縄文時代後期	B	1	先
30	若園	熊本県玉名郡	縄文時代後期	A	1	軸
31	西岡台	宇土市	縄文時代後期	A	1	軸
32	浜ノ洲	宇土郡	縄文時代後期	A	1	軸
33	大矢	本渡市	縄文時代後期	B	1	軸
34	一尾	天草郡	縄文時代後期	C	1	軸 テングニシ
35	沖ノ原		縄文時代後期	A	2	軸
				B	9	先

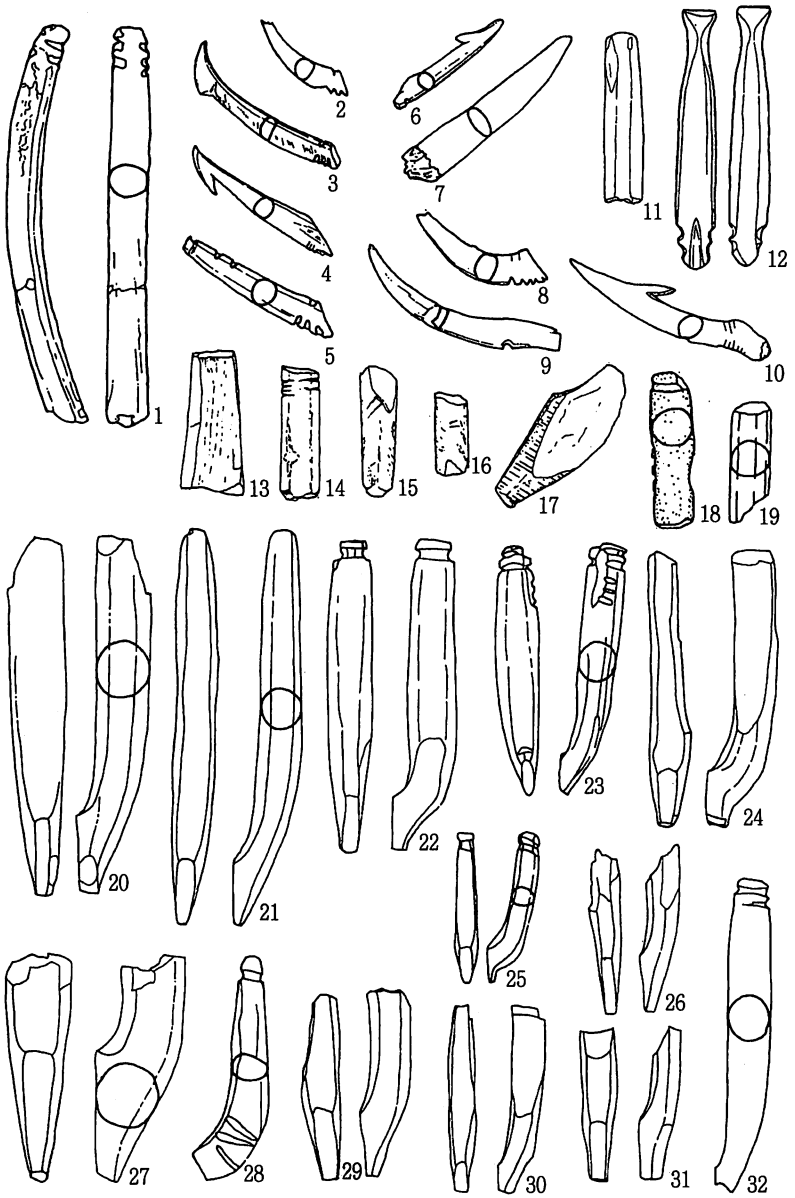
文献（第3表の遺跡番号に同じ）

- 1 遼寧省博物館・旅順博物館「大連郭家村新石器時代遺址」『考古学報』1984年3期。
- 2 遼寧省博物館・吉林考古系・大連市文物管理委員会「遼寧大連大嘴子青銅器時代遺址の発掘」『考古』1996年2期。
- 3 遼寧省文物考古研究所・大連市文物管理委員会・莊河市文物管理弁公室「大連市北吳屯新石器時代遺址」『考古学報』1994年3期。
- 4 釜山広域市博物館『凡方貝塚Ⅱ』1996年。
- 5 注4に同じ。
- 6 国立光州博物館『突山松島Ⅰ』1989年、同『突山松島Ⅱ』1990年。
- 7 国立晋州博物館『欲知島』1989年。
- 8 孫宝基『上老大島の初期人類』1982年。
- 9 国立晋州博物館『煙台島Ⅰ』1993年。
- 10 壇国大学校博物館『泗川旧坪里遺蹟』1993年。
- 11 渡辺誠『日韓交流の民族考古学』1995年。
- 12 注4に同じ。
- 13 及川民次郎「南朝鮮牧ノ島東三洞貝塚」『考古学』4巻5号、1933年、横山将三郎「釜山府絶景島東三洞貝塚」『史前学雑誌』5巻4号、1933年、*L.L. Sample, A Contribution to Korean Neolithic Culture History. Arctic Anthropology. 11-2. 1974.*
- 14 申鐘煥「蔚州新岩里」『嶺南考古学』6、1989年。
- 15 東亜大学校博物館『蔚州牛峰里遺蹟』1997年。
- 16 関東大学校博物館『東海市の歴史と文化遺蹟』1996年。
- 17 ソウル大学校博物館『鰲山里遺蹟』1984, 85, 88年。
- 18 金元龍「春川校洞穴居遺蹟と遺物」『歴史学報』20, 1963年。
- 19 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院『羅津草島原始遺跡発掘報告』1957年。
- 20 А.П.ОКАДИКОВ Древнее поселение на полуострове песчаном у Владивостка. ИЗДАТЕЛЬСТВО АКАДЕМИИ НАУК СССР 1963.
- 21 山鹿貝塚調査団『山鹿貝塚』1972年。
- 22 鞍手町埋蔵文化財調査会『新延貝塚』1980年。
- 23 山崎純男の教授による。
- 24 唐津市『菜畑』1982年。
- 25 長崎県峰町教育委員会『佐賀貝塚』1989年。
- 26 坂田邦洋『対馬の考古学』1976年。
- 27 麻生優編『下本山岩陰』1973年。
- 28 注26に同じ。
- 29 長崎県教育委員会『宮下遺跡調査報告 解説編』1971年。
- 30 菊水町教育委員会『若園貝塚』1981年。
- 31 山崎純男の教授による。
- 32 注31に同じ。
- 33 本渡市『本渡市史』1991年。
- 34 注31に同じ。
- 35 五和町教育委員会『沖ノ原遺跡』1984年。

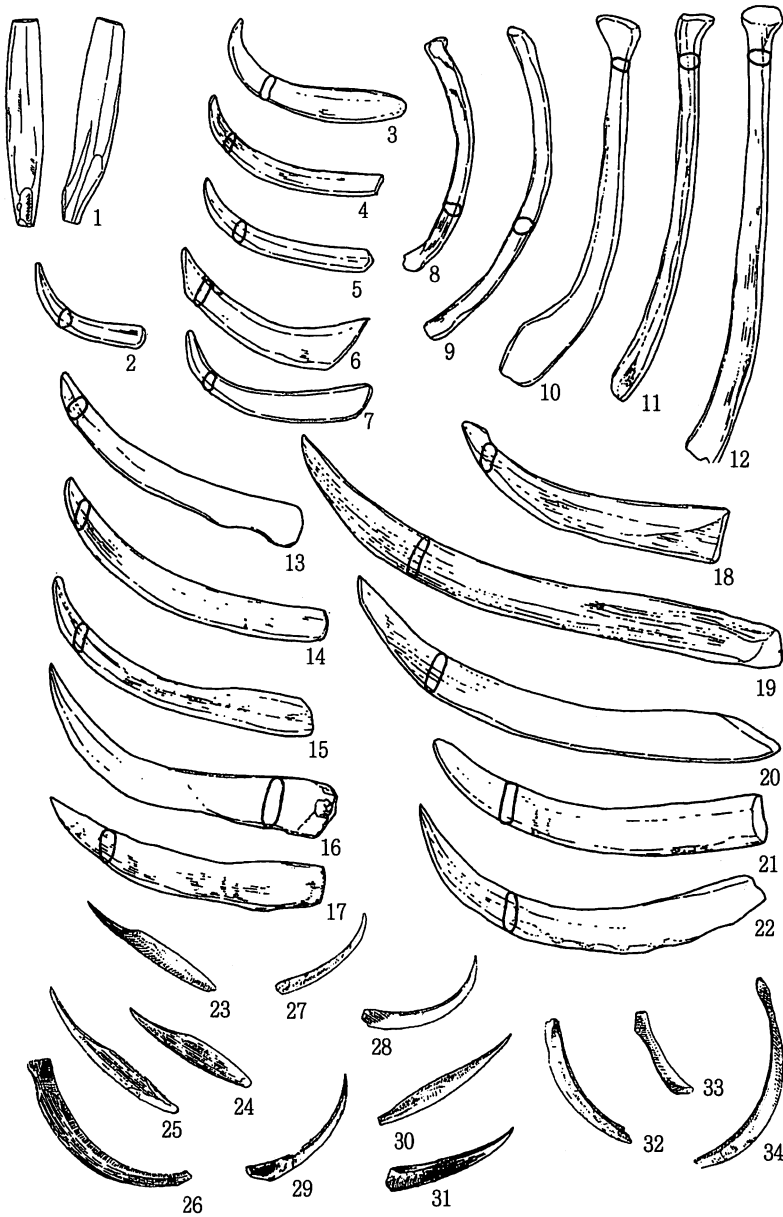


第5図 結合式釣針実測図(1)(縮尺1/2) 1~5;郭家村、6·7;北吳屯、8·13;松島、9;大嘴子、10~12;東港里、15~20;上老大島、21;旧坪里、22~30;煙台島、31~45;凡方洞

環東中国海の先史漁撈文化（甲元）

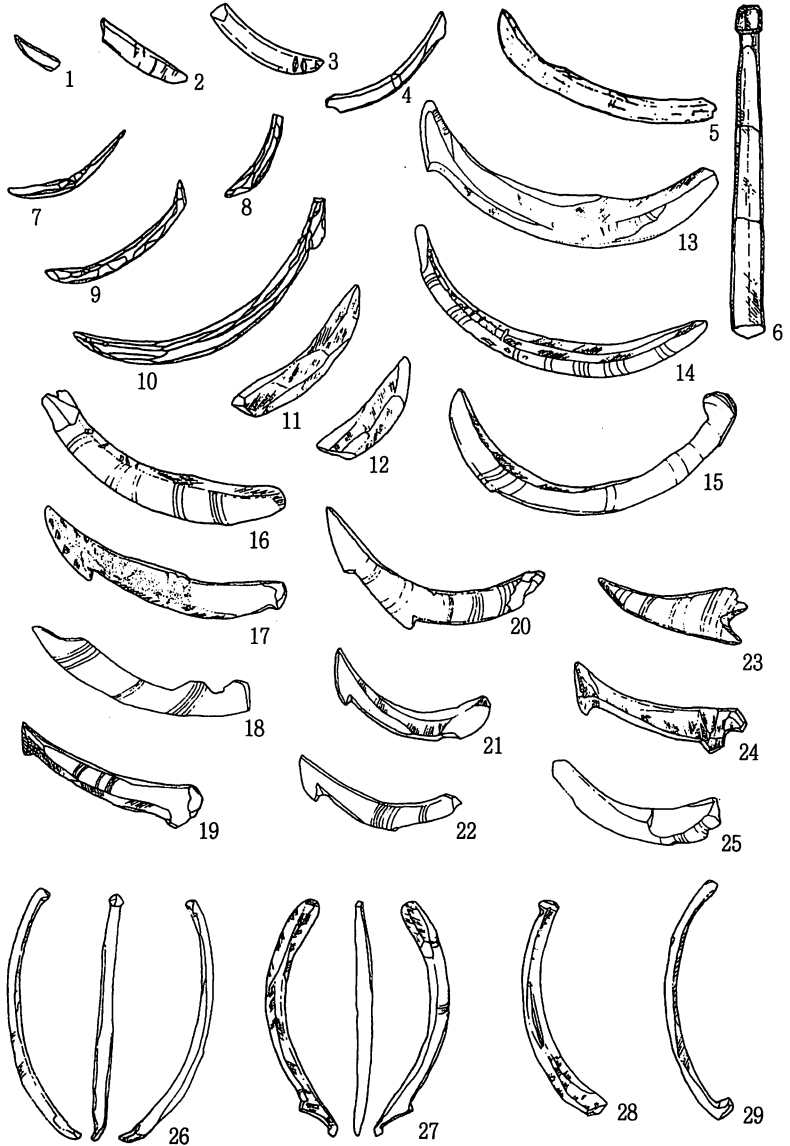


第6図 結合式釣針実測図(2) (縮尺1/2) 1~10; 東三洞、11; 安島、12; 大鏡島、13~17新岩里、18・19; 先峰里、20~32; 鰲山里

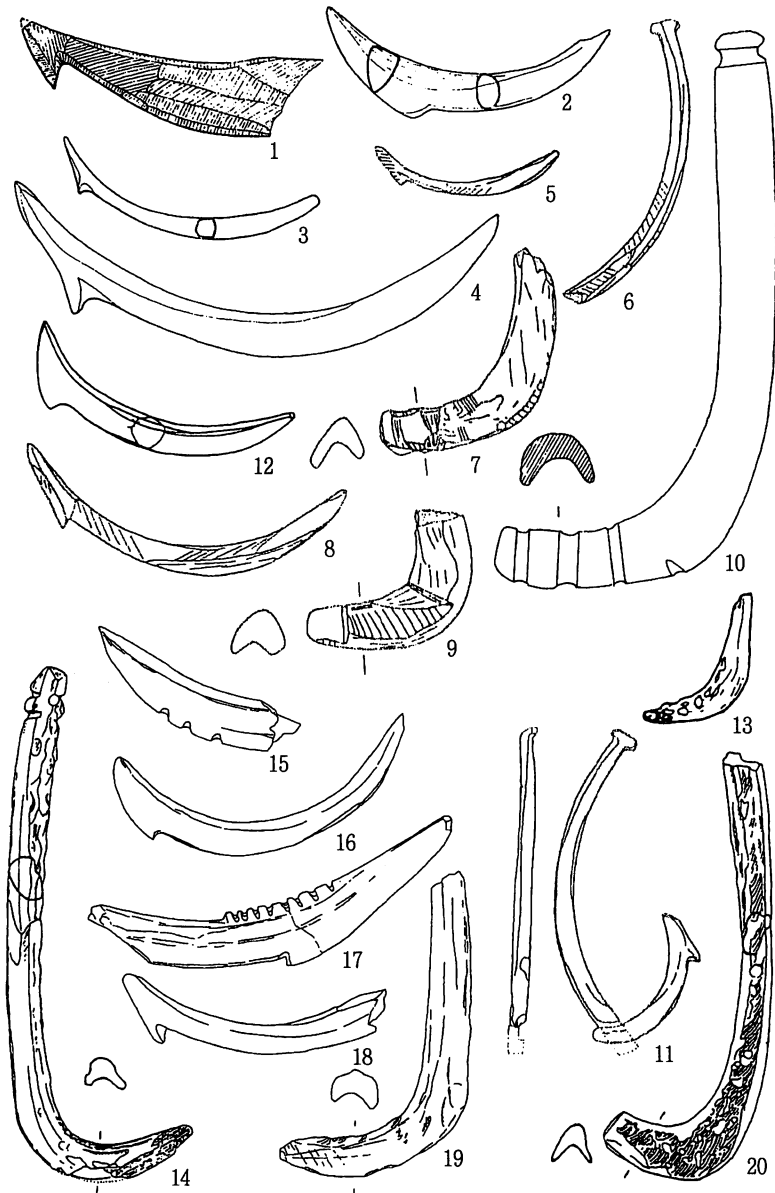


第7図 結合式釣針実測図(3) (縮尺1/2) 1; 校洞、2~22; 草島、23~24; ベスチャヌイ



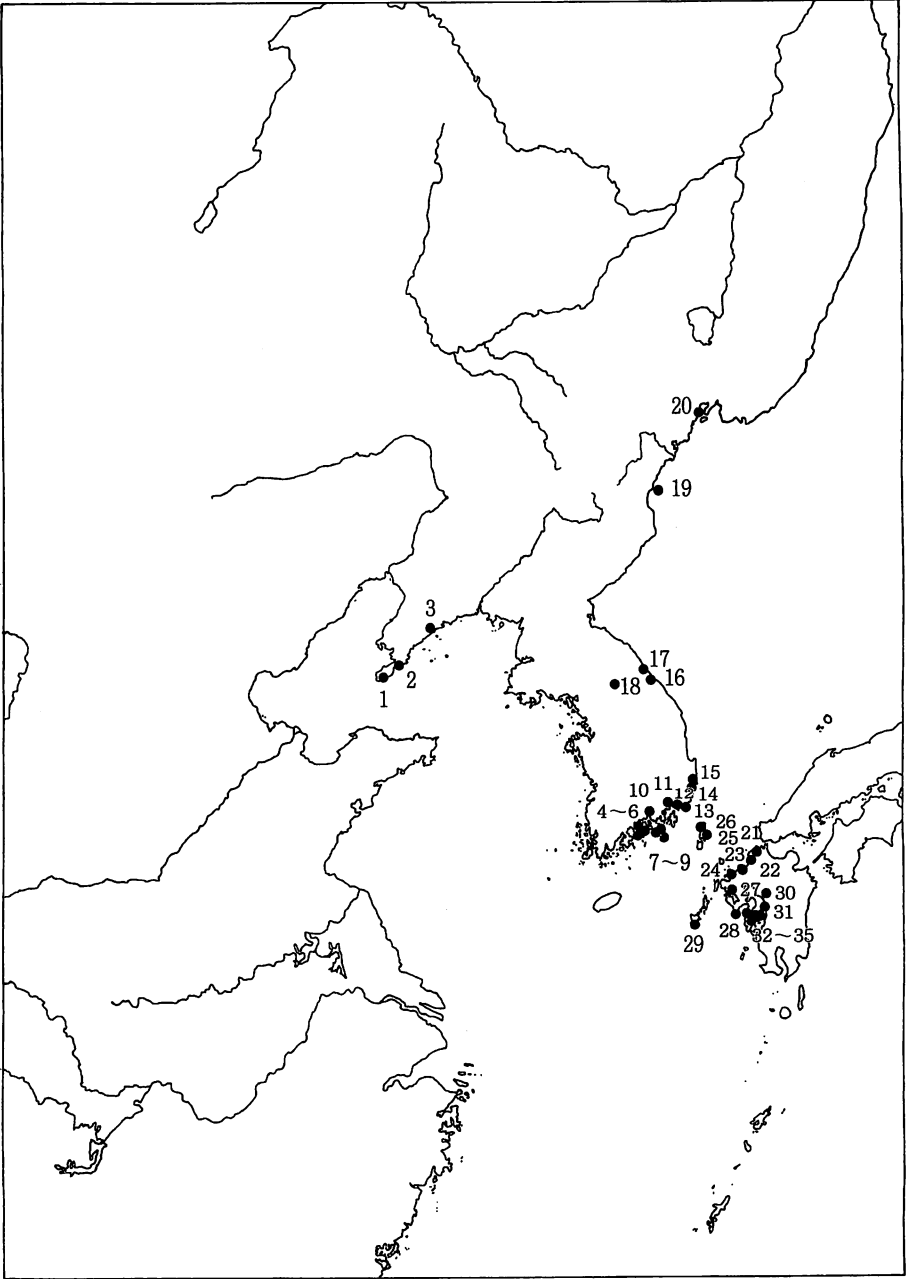


第8図 結合式釣針実測図(4)(縮尺1/2) 1~3; 山鹿、4;  
桑原飛櫛、5・6; 新延、7~10; 菜畑、11~29; 佐賀



第9図 結合式釣針実測図(5) (縮尺1/2) 1・2; 志多留、3~11;  
 脇岬、12; 宮下、13; 若園、14; 浜ノ洲、15~19; 沖ノ原、20; 下本山

環東中国海の先史漁撈文化（甲元）



第10図 結合式釣針出土遺跡分布図（数字は一覧表の番号と一致）

## II

東中国海沿岸地域で見られる単式釣針は長さ5 cm未満で無逆刺の類型が多数を占めている。所属年代が最も遡る事例は大汶口文化段階の内陸淡水地域で発見されていて、大汶口遺跡では小型、魯家溝遺跡では6 cm以上のものが認められる。続く龍山文化期では姚官荘や唾叭荘で大型が、大城山では小型があり、今日のところ、大型と小型がほぼ同時期に出現したとみることができる。

大汶口文化期から龍山文化期にかけての内陸地帯で発見される魚類には、次のような種類がある。<sup>(6)</sup>

五村遺跡…アオウオ *Mylopharyngodon piceus*

北辛遺跡…アオウオ

魯家溝遺跡…アオウオ

ソウギ≡ *Ctenopharyngodon idellus*

尹家城遺跡…ボウウオ *Elopichthys bambusa*

この他にも江蘇省の先史時代遺跡では、コイ、フナなどの出土が確認されており、今日でもコイ、フナは中国の代表的な魚種であることを考慮すると、大型、小型の釣針はこれらコイ科の淡水産の魚類にに応じて、使用された可能性が高い。遼東半島地域では、大型釣針三点が検出されている。これらはいずれも紀元前一、〇〇〇年前後の青銅器時代の所産で、青銅製の逆刺をもつ釣針の出現期以降であり、形態的類似性から、それとの関連性を示唆するものであろう。

朝鮮南部では古南里貝塚と欲知島東港里貝塚で小型釣針が各二点出土している。分布上隔離された状況なのでその性格については不明な点が多い。

東北朝鮮や沿海州南部の地域では銛などの刺突具に比べ、釣針はあまり発達していない。西浦項貝塚では新石器時代末

期にイノシシの牙を使用した、大型と小型の釣針が計三点と、ボイスマン、ペスチャヌイ両遺跡で内側に逆刺をもつ類が各一点発見されているに過ぎない。この地域で出土した魚類には、

農圃遺跡：ヒラメ *Paralichthys olivacea*

草島遺跡：ブリ *Seriola quinqueradiata*

スケトウダラ *Theragra chacoogramma*

マフゲ *Fugu rubripes*

アカガレイ *Hippoglossoides dubius*

ヨルギ *Salvelinus fariopis*

アユ *Plecoglossus altivelis*

トシロ *Magurnda obscura*

ペスチャヌイ：コマイ *Eleginus gracilis*

カサコ *Sebastes* sp.

マルフゲ科 *Spheroides* sp.

カジカ科 *Cottidae* sp.

等があり、刺突具による漁撈の補助的なものであったと推測できるところである。

九州の縄文時代釣針については渡辺誠による研究<sup>(1)</sup>があり、基本的には縄文時代後期にみられる「東日本的要素」の一つとしての位置づけがなされている。福岡県新延貝塚出土鹿角製軸が、結合式釣針の軸とも考えられる(第一四二七)ことから、これを除外すると、すべて長さが5cm未満の小型であり、中・四国地域の大型釣針とは著しく異なること、山鹿貝塚では縄文時代中期に溯る事例があることなどは、「東日本的要素の南下現象」だけでは解釈されない余地がある。しか

## 環東中国海の先史漁撈文化(甲元)

も中・四国や近畿地方の釣針出土遺跡は基本的には内湾性の遺跡立地をなしているのに対して、九州地域で単式釣針を多量に出土した佐賀貝塚、脇岬遺跡、沖ノ原貝塚などは外洋性の立地を示していて、内海面や内水面の漁撈を主体とする東日本の漁撈とは大きな異なりがそこに見られる。この遺跡立地の類似性や軸上端に刻みもしくは抉りを入れて緊縮する手法などは、欲知島東港里遺跡のものとの関連性が高いとみることもできる。

## III

逆T字形釣針についてはこれまであまり注目されてこなかった。そうした中、渡辺誠はこの型式の釣針が渤海湾沿岸地域に特徴的であることを挙げ、東日本の逆T字形釣針と比較した後で、両者共通してシベリア起源を説いた。<sup>(8)</sup>しかし九州出土の類例に言及せず、またシベリアでの事例を検証することなく論じられたために、見通しに誤りがあった。

逆T字形釣針は長さが5 cmから10 cmと一定し、7 cm前後の大きさが一般的である。この類型で年代が最も遡上する事例は、魯家溝遺跡と白石村遺跡の大汶口文化期に属するものである。魯家溝遺跡の報告は「両端が尖り、長さ五・一 cm」とあるだけで、詳細は不明であるが、同遺跡の龍山文化期のものは、針中央部には、何らの加工した痕跡は見当たらない。一方白石村貝塚中央部両側に抉りを入れるもので、年代的には魯家溝遺跡の出土品よりは古く、今日知られる限り、当初から緊縮のための処置が施されていたことを知りうる。

中央部に抉りを施さない類型では、ヤスと誤認される可能性が高く、本来は未だ多く出土していることが想定できる。この類の釣針は紀元前三、〇〇〇年紀末から二、〇〇〇年紀にかけての渤海湾周辺地域で最も発達し、しかも一遺跡あたりの出土量が多い点に特徴が見られる。この種の釣針はユーラシア大陸北半部からアメリカ大陸北部にかけて広く分布するもので、アメリカ・インディアンの民族事例でも、中国東北地域の民俗例でも、延縄に使用されることが知られている。<sup>(9)</sup><sup>(10)</sup>中国東北地域の内陸河川では、河川を横切る形に主縄を張り、脇糸を垂らして釣針を装着するのに対して、沿岸部でのア

メリカ・インディアンの事例では、大きな錘に主縄を括り、脇糸を付けて逆丁字形釣針を装着するものであり、使用方法に異なりが見られる。渤海湾地域では他の場所には見られない、大型の石錘がみられることから、インディアンの使用事例が格好の示唆を与えるであろう（第十一図）。従って、沿岸に接近する魚類がその捕獲対象になったことがそうていきよう。

逆丁字形釣針が出土する遺跡やそれと類似した立地の遺跡で発見される魚類としては、以下のものがある。

三里河：ヒラ *Iisa elongata*

ボラ *Mugil cephalus*

クロダイ *Sprus macrocephalus*

サワラ *Somberomorus nipponicus*

白石村：クロダイ

マダイ *Pagros major*

スズキ *Lateolabrax japonicus*

トラフグ *Fugu rubripes*

照格荘：クロダイ

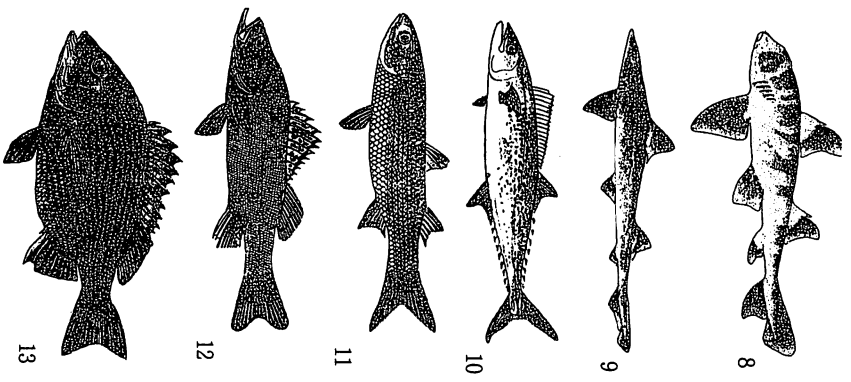
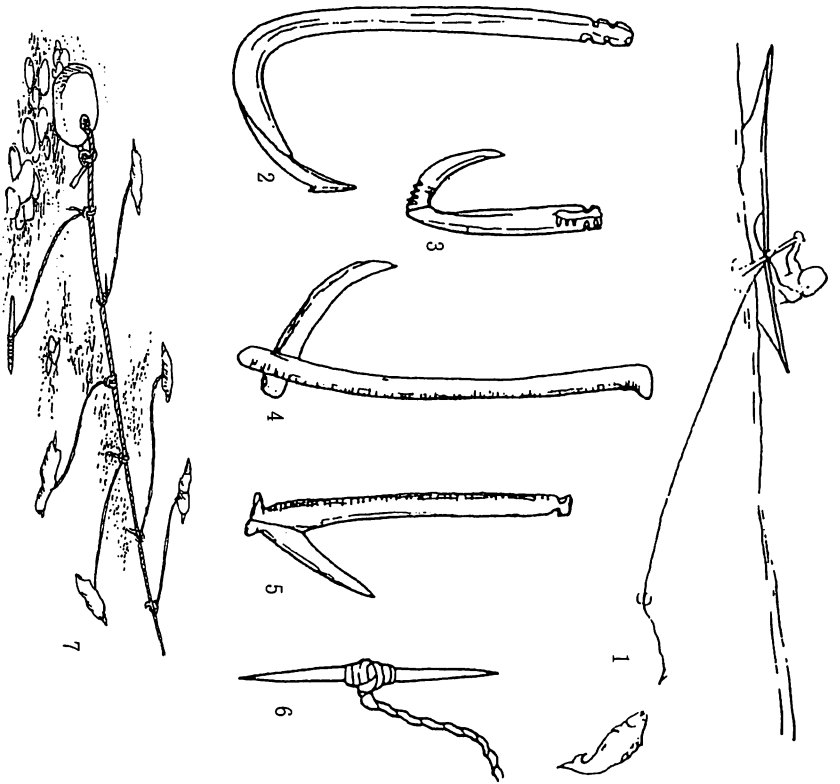
サワラ

羊頭窪：サワラ

ヒラメ *Paralichthys divaceus*

アカエイ *Dasyatis akajei*

これら魚種の中で、沿岸部に棲息する魚類としてはクロダイ、スズキ、ボラ、フグ、ヒラメ、アカエイなどがあり、マ



第11図 漁具、漁法とその主要対象魚類  
 1；結合式釣針のトローリング、2；西北九州型、3；鯉山里型、4；草島型、5；郭家村型、6；逆丁字形釣針緊縮法、7；逆丁字形釣針使用法、8；ネコザメ、9；ホシザメ、10；サワラ、11；ホラ、12；ヌズキ、13；クロダイ



ダイも季節によっては沿岸部に近接して生活する。サワラ、ヒラは回遊魚であり沿岸部に近接する機会はあまり多くないことから、渤海湾地帯では逆T字形釣針がマダイ、クロダイ、スズキ、ボラなどを主たる対象にしていたことが窺がえる。黄海沿岸部の古南里遺跡や朝鮮海峡北岸の地帯でも、遺跡発見自然遺物の中に同上の魚種が確認されることから、この地域でも逆T字形釣針の捕獲対象は同様であったことが知られる。

逆T字形釣針を出土する九州の遺跡出土魚類には次のようなものがある。

佐賀貝塚…マダイ

クロダイ

ヘダイ *Sparus acrba*

イシダイ *Oplegnathus fasciatus*

コブダイ *Semicossyphus reticulatus*

ブリ *Seriola quinqueradiata*

スズキ

トラフグ

山鹿貝塚…マダイ

ヘダイ

クロダイ

スズキ

フグ類

大浜貝塚…ブリ

環東中国海の先史漁撈文化(甲元)

環東中国海の先史漁撈文化（甲元）

スズキ

マダイ

カンダイ

ハタの一種 *Serranidae*

脇岬遺跡…エイ目

イシダイ

ハタ属

マダイ

ブリ属

マグロ属

ソウダガツオ属

カツオ属

これら遺跡出土の魚骨は基本的には朝鮮や渤海湾一帯の魚類と変わりはなく、逆丁字形釣針は沿岸部に棲息するスズキ科の魚類を中心とした漁撈であったと想定できよう。すなわち逆丁字形釣針は渤海湾→朝鮮西海岸→朝鮮海峡→九州西海岸を結ぶ共通する漁法であることができる。<sup>(11)</sup>

逆丁字形釣針は九州では縄文時代後期に出現し、弥生時代にまで引き継がれる。朝鮮では新石器時代の末期から青銅器時代に存在する。渤海湾一帯では紀元前二、〇〇〇年紀の温暖期に隆盛する漁法の一つであり、海進により沿岸部に格好の漁場が形成された時期と一致する。このことからすれば、縄文時代後期相当期には山東、遼東、朝鮮西海岸、朝鮮南海岸、西北九州を繋いで大きな情報ルートが存在したことを意味している。<sup>(12)</sup>

渤海湾一帯での結合式釣針についてはこれまでに言及されることはあまりなかった。今までのところ遼東の郭家村貝塚と北呉屯貝塚で針部が確認され、大嘴子遺跡で鹿角製の軸が発見されているにすぎない。針部は軸と結合する部分に面取りがあり、これと反対側の針末端部には刻みもしくは抉りによる緊縮のための処置が施されている点に特徴が見られる。年代的には紀元前三、〇〇〇年紀から二、〇〇〇年紀にかけての時期であり、今のところ他地域との関係は分からない。郭家村の事例を遡上する可能性のある結合式釣針の例として、北辛遺跡の上端に抉りをもつ鹿角製の軸を挙げることでできるかもしれないが、<sup>13</sup>それと釣り合う針部が確認できないことから、将来を待つしかない。

結合式釣針はシベリア<sup>14</sup>やアメリカ・インディアン<sup>15</sup>の民族事例によると、石の錘を付けて、トローリング漁法で回遊魚を捕獲するのに使用されるものであり(第十一図)、中国東北内陸部では同じくトローリング漁法により、チョウザメの捕獲が知られている。これらのことから単式釣針や逆T字形釣針とは異なっており、より大型の魚類を対象とした漁法であったことが窺えよう。渤海湾で結合式釣針の対象と想定される魚類として、遺跡出土の魚骨を取り上げると、サワラ、ヒラ、チョウザメ *Acipenser* sp. などが想定されるが、これ以外にも黄海に多く生息するサメ目も対象としたことが朝鮮南部や西北九州の事例に照らして十分に予想される。

日本と朝鮮の結合式釣針に関してはこれまでに渡辺誠により朝鮮海峡を挟む両地帯で共通する漁法として取り上げられてきた。<sup>17</sup> 西北九州型結合式釣針(坂田邦洋の言う脇岬B型)<sup>18</sup>は慶尚南道の上老大島での出土が確認されることから、両者の繋がりは無視しえない。

河仁秀は凡方洞貝塚の報告書の中で結合式釣針の軸について、次のように結合式釣針の分類を行った。<sup>19</sup>

I類…軸の形態は全体的にI字形をなし、頭部には一周する溝を巡らす。針と接合する部分に面取りを行い、その反

環東中国海の先史漁撈文化（甲元）

対側に突出部を設ける。

Ⅱ類…軸身の断面が隅丸方形もしくは長方形でⅠ類よりも平たい。また接合部が若干窪み、反対側には緊縮のための刻みがある。

Ⅲ類…平面形は丁字形をなし、頭部に溝を施し、軸末端の接合面を面取りして、その反対側に刻みをもつ。

Ⅳ類…類と形態は類似するが、接合部反対側に刻みが無いもので、そこが曲線的になるA形式と突出部をもつB形式に分かれる。

これら各類型は凡方洞遺跡での層位関係からⅠ・Ⅱ↓Ⅲ↓Ⅳと変遷することを指摘している。

しかし必ずしもこれほど明確に形式的推移するものではない。今のところ石製軸をもつものから鹿角製軸への変化という大まかな変遷を捉えられるだけである。針部と軸部の結合方法に着目すると（第十一図参照）、針部の末端部と軸部の末端部を面取りして繋ぐ方法（鰲山里型と郭家村型）、針部と軸部を重ねて繋ぐ方法（草島型）、針部の下部に溝を付け、軸部を差し込む方法とが見られる（西北九州型）。第三番目の方法は針をイノシシの牙で拵えるものの特徴的に見られるが、これは正林護が指摘するように、齒冠部に逆刺を設けるといふイノシシの牙の利用部位から齧されたものであり、針部がイノシシの牙を使用するようになった結果として、出現した装着方法と想定される<sup>20)</sup>。

結合式釣針の系譜に関しては、小畑弘己が論じるようにバイカル地域との年代的・地理的隔たりが大きく、直接その地域と結び付けることは現状では不可能といわざるをえない。但し日本の東北・北海道の縄文前期に結合式釣針が認められることから、黒龍江下流域を含めた東北アジアのどこかであることは十分に予想されるが、今日見られる結合式釣針分布の状況下では日本海の西沿岸地域は独自の起源であった可能性もある。

結合式釣針を出土する遺跡で、逆丁字形釣針とは異なった捕獲対象として挙げられる魚類としては、

煙台島遺跡…ネコザメ科 *Heterodontus* sp.

アオザメ *Isurus glaucus*

メジロザメ科 *Carchainidae* sp.

ツノザメ科 *Squalidae* sp.

上老大島遺跡…サメ科 *Isuridae* sp.

サワラ *Scomberomorus nipponicus*

東三洞貝塚…サメ科

ブリ *Seriola quinqueradiata*

凡方洞貝塚…ツノザメ科

志多留貝塚…ネズミザメ *Lamna* cf. *Corrubica*

アオザメ

佐賀貝塚…アオザメ

モウカザメ *Lamna ditropis*

ブリ

脇岬遺跡…ブリ属

マグロ属

ソウダガツオ属

カツオ属

大浜貝塚…ブリ

中島貝塚…サメ

環東中国海の先史漁撈文化(甲元)

## 環東中国海の先史漁撈文化（甲元）

カツオ

宮下貝塚・ネズミザメ

などがあり、圧倒的にサメ類が多い。これにカツオ、マグロ、サワラ、ブリ、ニベなどの回遊魚が加わるのであり、サメ類を基本的な捕獲対象としながらも、季節的にその他の大型回遊魚も対象としたことを示している。

朝鮮東北部と沿海州南部では三遺跡で結合式釣針の出土が確認されている。この他にも西浦項貝塚の新石器時代末期層と青銅器時代層出土品に結合式釣針の針部とも想定できる漁具があるが、判然としない。この地域に見られる軸は鹿角製であるが、針はブタの牙、鹿の骨、イルカの犬歯などヴァリエーションがある。しかし針部分と軸部の結合方式は単純に重ねて繋ぐやりかたである。

おわりに

環東中国海沿岸地域で出土する単式釣針は新石器段階のものはすべて小型で、青銅器時代以降大型のものが出現する。中国の場合沿岸部よりも淡水地域で小型単式釣針が早く出現することから、河川漁法の応用として、沿岸部で使用されたと見ることが出来る。しかし朝鮮や九州での始まりに関しては、遼東地域との関連は不明である。一方九州出土の小型単式釣針も南部朝鮮と関連して出現するものか、あるいは東日本からの内海内水面漁撈の伝播により始まったものか、現状では明らかにしたい。結合式釣針や逆T字形釣針に比べ、地域的な偏差が大きい。

東中国海沿岸地域で最も早く出現する釣具は結合式釣針で、朝鮮の東海岸と朝鮮海峡を挟む両地域に見られる。鰲山里遺跡や凡方洞貝塚で出土する鰲山里型釣針が初源で、軸を石で製作するものであり、バイカル地域の凍石で軸を作ることと共通する。しかし今のところ両者の関係は不明である。これが隆盛するのは紀元前三、〇〇〇年期末から二、〇〇〇年紀にかけてであり、軸は石製と鹿角製があり、針先は骨製やイノシシの牙が使用される。イノシシの牙を使用するとき、

齒冠部に逆刺を作り、齒根部を軸と緊縮するために瑛瑯質を削り込むことで、西北九州型の結合式釣針が誕生する。渤海湾一帯においても紀元前三、〇〇〇年紀に鹿角や骨を利用した結合式釣針が出現する。針先の形状が朝鮮で展開する形態とは異なりがあり、両者の関係は詳らかではない。内陸河川地域のチョウザメなどの大型魚を対象とした漁撈と関連するものか、あるいは朝鮮南部地域の漁法の伝播かの両者の可能性がある。東北朝鮮と沿海州では紀元前一、〇〇〇年紀の青銅器時代に結合式釣針が卓越する。草島貝塚では多量の鹿角骨製の針先と軸が出土するが、ペスチャヌイ遺跡では針先にイルカの歯を使用するなど、漁具としての統一性が見られない。これは鳥や獣の爪を利用するという古い伝統が生きていると見るべきか、あるいは結合式釣針による漁法の周辺地域での現象とするべきか判断に迷う。

こうした結合式釣針は基本的には外海において、トロリーングをしながら釣り上げる漁法であり、出土する魚骨との対比からその対象としてサメ目が挙げられるが、その他にもサワラ、マグロ、カツオ、ブリ、ニベなどの回遊魚も捕獲対象であったことが発掘された資料から想定できる。従来の石銛などの刺突具と組み合わせ、より効果的な漁法として結合式釣針が取り入れられたものであろう。

逆丁字形釣針は紀元前六、〇〇〇年紀に渤海湾周辺に出現し、紀元前三、〇〇〇年紀末から二、〇〇〇年紀にかけて遼東地域で卓越する。朝鮮南部では欲知島東港里貝塚や東三洞貝塚で見ることが出来る。東港里貝塚では遼東の吳家村遺跡<sup>(23)</sup>出土品と類似した猪型土偶が発見されていて、両者が緊密な関係であったことが知られ、朝鮮や西北九州出土の逆丁字形釣針は渤海湾地域との関連の中に出現したことが窺がえる。

逆丁字形釣針は延縄による漁法であり、沿岸部に接近する対象を捕獲するためのもので、スズキ、ボラ、クロダイあるいはマダイなどが主たる対象であったことが出土魚骨から推察される。

紀元前二、〇〇〇年紀の段階で渤海湾と朝鮮南部、西北九州に共通する漁具と漁法の存在は、彼我の間に恒常的な繋がったことを示す。それはまさしく稲作栽培を含めた雑穀農耕文化と密接に係りあっていたことを意味するものであり、

環東中国海の先史漁撈文化（甲元）

日本における農耕文化成立に重要な役割を担っていたことを雄弁に物語るものである。

本文を草するにあたり、渡辺誠氏のこれまでの研究成果から学び、山崎純男氏からの教授によることが多かったことを記して謝意を表したい。

なお本稿は平成十年年度科学研究費特定領域研究「日本人および日本文化の起源に関する学際的研究」（考古学部門代表 春成秀爾）補助金による研究成果の一部である。

注

- (1) 渡辺誠「中国古代の釣針」『東アジアの考古と歴史』一九八七年。
  - (2) 雨宮瑞生「先史時代環東中国海諸地域における骨角牙製漁撈具」『物質文化』四八号、一九八七年、同「南九州の縄文時代釣針」『季刊考古学』第二五号、一九八八年。
  - (3) 金建洙「韓半島の原始・古代漁業」『韓国上古史学報』第二〇号、一九九五年。
  - (4) 申叔静「我が国南海岸地方の新石器文化研究」『学研文化社、ソウル、一九九四年。
  - (5) 甲元眞之「先史時代対外交流」『岩波講座日本の社会史』第巻、一九八七年。
  - (6) 以下先史時代遺跡出土の魚骨の出現に関しては、甲元眞之「環東中国海沿岸地域の先史文化」『平成九年年度科学研究費重点領域研究（一）考古学研究成果報告書、一九九八年、及び同平成一〇年度科学研究費特定領域研究（A）考古学研究成果報告書、一九九九年を参照のこと。
  - (7) 渡辺誠「縄文時代の漁業」雄山閣出版、一九七三年。
  - (8) 注(1)に同じ。
  - (9) H. Stewart, *Indian Fishing*. Seattle University of Washington Press, 一九九七
  - (10) 岡本正一「滿支の水産事情」水産通信社、東京、一九四〇年。
- この点に関しては一九九二年中国石家荘市で開催された環渤海考古学術討論会において既に発表した。
- (11) 甲元眞之「黄・渤海周圀地区的史前時期漁撈」『環渤海考古学術討論会論文集』一九九六年、石家荘、知識出版社。
  - (12) 甲元眞之「朝鮮先史時代の漁撈関係遺物」『古文化談叢』三〇集、一九九三年。
  - (13) 中国社会科学院考古研究所山東隊・山東省滕縣博物館「山東滕縣北辛遺址発掘報告」『考古学報』一九八四年二期。
  - (14) Липинова, Очерки по этнографии Алеутов, Ленинград, 1975.



- (15) 注(9)に同じ。  
(16) 注(5)に同じ。  
(17) 渡辺誠『日韓交流の民族考古学』名古屋大学出版会、一九九五年。  
(18) 坂田邦洋『対馬の考古学』一九七六年。  
(19) 釜山広域市博物館『凡方貝塚』一九九六年。  
(20) 長崎県峰町教育委員会『佐賀貝塚』一九八九年。  
(21) 小畑弘己『シベリア先史時代の釣針と漁撈』『古文化談叢』三集、一九九六年。  
(22) 国立晋州博物館『欲知島』一九八九年。  
(23) 遼寧省博物館・旅順博物館・長海県文化館『長海広鹿島大長山島貝丘遺址』『考古学報』一九八一年二期。